

## 岡先生の事

### 国方栄二

記憶の糸を辿るとき、過去の出来事として意識に上ってくるのは、必ずしも最も肝要な事柄ばかりではなく、なにげない光景が彷彿としてくることがよくある。わたしにとって岡先生の思い出はそのような断片的な映像として残っている。たしか山下太郎君がルクレーティウスについて発表した時のことだ。古代哲学という他専攻の私もなにかの縁で出席していた。亡くなった中村善也さんもその場に居合わせたように思う。中村先生はその頃京大でルクレーティウスの演習を受け持っておられたのだ。研究発表会が終わり、場所を外に移したが、京都の百万遍界限の中華料理屋だったような記憶がある。私は人に先立って話すようなことは無論嫌いだから、おとなしく坐って静かに周囲の話に耳を傾けていた。次第に辺りは夕闇につつまれて、煌々と照らす電燈の下でビールを飲んでいると、いつしか話は研究発表の内容を離れ、研究者たちの日々の生活のことに移っていった。その時、岡先生も楽しそうに談論の中に入られていたが、喰い尽くされて残った酢豚の煮汁を何度も箸で丁寧掬って口に運ばれた。その意外な光景を私は黙って眺めていたが、先生はなんら意に介する様子はなかった。私は京大教授としての威厳よりも、あたかも学生が同輩と気軽に対話するような先生の飾らないその態度にますます好感をもった。

先生はよく「それは哲学者の解釈だ」と言われた。その頃行われていたヘシオドスの研究講義では、しばしば廣川洋一さんの『ヘシオドス研究序説』が槍玉に上がった。そして、いわゆる哲学的解釈の偏りには容赦ない態度をとられたが、批判するに足るだけの文献を十分に読んでおられた。そればかりでなく、先生は哲学にも深い関心をもっていた。「自分の一生を捧げて悔いすることのないのは、ホメロスと悲劇とプラトンだ」とよく口にされた。実際、プラトンについて文芸論以外にもよく研究され、よく知っておられたように思う。京大での最終講義は文学論と題されていたが、ギリシア文学の基礎理論について多くの用例のもとに論じられ、その骨格が示された。先生はその短い晩年にオイディプスをしばしば扱われたが、自らの見解を正確に伝えておくことを重大視されたからであろう。しかし、非情の死は文学基礎論をさらに展開したもの

を公表することを許さなかったようだ。ホメロスやヘシオドスに関して私が不  
相応の論文を書いた時、先生から懇切なるお手紙を頂戴したことがあるが、そ  
の中で書かれたことが、先生自身もたれたギリシア文学の理念とどのように  
繋がっていくのか、もう少し知りたかった。が、これは最早叶わぬことになっ  
てしまった。

私が「死の倫理」と題して、不治の病に罹った者には自殺を是とする考え  
が、プラトンにもストア派にも同様にあり、ここでいう自殺とは今日の安楽死  
の意味であるという趣旨の論文を書いて先生の下に送ったことがあった。その  
時、先生は「この年になって良いものを読ませていただいた」と返書を寄こさ  
れた。しかし、記録によればその前年に先生はすでに癌の手術をなされ（中務  
哲郎「岡道男先生と『キケロー選集』」）、生死の淵に立たれていたのだ。先  
生はどのような気持ちで読んでおられたのかと、今にして思う。